白馬三山

毎日新聞旅行　　4～7 日

白馬岳は白馬→鹿島槍(1977 年)と鹿島槍→白馬(1989 年)に続いて 3 回目である。白馬名物の大雪渓を登ってみたいというのが動機である。大雪渓は落石による事故が多いところであるので多少の緊張感はあったが、そのくらいの方がやりがいがある。事実、我々が登っているときにも、コロコロやザーザーといった落石の音を聞いたが、幸い遠くの方であった。

メンバーは女 11 人、男 7 人であり、いつもに比べると男女とも若目の人も数人含まれており、ネイルアートのお姉ちゃんもいたのにはビックリ。添乗は関根のおばちゃんと打田のジーサマ（本職はガイドブックのライターということで初めて会った)。これにしろうま山案内人組合の下田さんがガイドとして導いてくれる。

白馬尻小屋

第１日目の宿泊は白馬尻小屋である。猿倉からは１時間ほどの距離であるので、明日のためのストレッチ程度の行程だ。小屋の手前でキヌガサソウが出迎えてくれる。その見事な咲きっぷりは栽培してるようにさえ見える。テーブルで生ビールを飲んでいたら、隣に座って一杯やっている老夫婦から話しかけられた。テントに泊まっていてこの日は白馬岳に登って降りてきたところであるという。なかなかいい雰囲気である。うらやましい。この小屋で下田ガイドと合流する。関根さんと話をしているときに、小屋の外に姿を現したのを見て一目でガイドだと判った。小柄であるが胸板が厚く見るからにガイド的である。冬はスキーのインストラクターをやっているようでそちらの方が本職みたいだ。いや、本当の本職は栂池でペンションを経営しているということであるが、こちらの方は奥さんが主役のようだ。

キヌガサソウ

第２日目、いよいよ大雪渓の登りである。「雪渓の勾配が急であるし、落石が多いから雪渓の途中では休みません」と下田ガイドから脅されたが、なだらかのところを探して適切に休憩を入れてくれた。葱平（ネギカッピラと呼ぶらしい）に着くと雪渓も終わりである。ここからはお花畑の世界であるが傾斜は急なままである。遅れる人も出始める。今回のメンバーはいつもよりちょっと弱い様だ。小屋に着いてから「高山病らしいです」と関根さんに訴える人がいた。昭和医大が常駐しているので見てもらっていた。私の経験では高々2700m で高山病なんてない。おそらく日射病か熱中症であろう。結局翌日降っていった。まあ、根性がないのよ。

白馬大雪渓

クルマユリ

ミヤマオダマキ

オダマキはコロラド州の州花で(columbine という)、今年のピレネーでも見た。しかし日本で見るオダマキが一番きれいだ。楚々として品がある。

ミヤマシオガマとミヤマツメクサ

イワギキョウ

白馬岳の近辺ではミヤマツメクサが一番沢山咲いていた。なぜかミヤマツメクサの咲いている近くにはミヤマシオガマが咲いているケースが多い。

ウサギギク

ミヤマダイコンソウ

ミヤマダイコンソウは私が一番最初に覚えた高山植物である。なんたって名前に特徴がある。葉っぱが大根の葉に似ているからこの名前が付いたということだ。

高山植物の中では黄色い花が咲いている期間が長いということだ。TV で見たのであるが植物学者の話によると、種類が多く特徴がないので長い間咲いて虫との接触を多くするということだ。

ウルップソウ

ミヤマダイモンジソウ

ミヤマクワガタ

スカイプラザ白馬

ウルップソウは北海道など北の方で咲くことが多いのであるが、今年は雪解けが遅かったせいで白馬の近辺でも見られた。文字通り大の字型のダイモンジソウは低いところの花だと思っていたが私の勘違いかも知れない。ミヤマクワガタは触角のように角が出ているのでこの名前が付いたという。

白馬岳山頂近くには 3000 名収容と言われる白馬山荘と 2000 名収容と言われる村営白馬山荘がある。我々は村営の方に泊まったが、山頂に近いもう一つの方には「スカイプラザ白馬」なるレストランもある。都会だ。

第 3 日は杓子岳と白馬鑓ヶ岳の白馬岳を含めて白馬三山と言われるコースの鑓温泉までの縦走である。今回はツアーのタイトルに「ゆとり」と銘打っているので、4 日間で一番長

早朝の剱岳遠望

杓子岳と白馬鑓ヶ岳

杓子岳

白馬鑓ヶ岳

い日と言っても行動時間 6 時間半であるから、出発も 6 時でよい。行程の前半分は稜線歩きで、後半分は鑓温泉までのお花畑の降り道である。稜線歩きでは花は少ないがコマクサが沢山ある。よくこんなところに咲くもんだと思うが、石だらけの処にしか咲けないのであろう。根っこは 6m 延びているということである。

コマクサ

この日の行程の後半分で、稜線を外れて大

サクラソウ

チングルマ

出原に入るとまたまたお花畑である。サクラソウやチングルマの大乱舞である。これも雪が遅かったためのものであろう。

鑓温泉手前の 1 時間くらいは鎖場などがケッコウ多くて、ビールを頭に描きながらの楽勝登山とはいかなかった。

鑓温泉は、山上の温泉としてはよく整備されており、到着時と夕食後の 2 度も入ってしまった。夕方には雷付きのものすごい夕立があったがこれにもめげずに野天風呂に入っている人もいた。夕食の時に、たまたま私の席の斜め前にいた下田ガイドが私のお茶を空にしろと催促する。お茶を飲み干したら持参の酒パックから一杯注いでくれた。この人とは馬が合う。

最終日の 4 日目は 5 時間の下りのみであるので楽なはずであったが、雪の残りが多くて雪の残る沢筋は緊張させられた。

昨年の 8 月は裏銀座へ行ってバテて打ちのめされたが、今回はトロイ人が混じっていたのでバテは感じなかった。やっぱり山は楽しくなければ。でも弱い人の含有率なんて指定できることはないのであるから偶然に頼るしかない。